

魅力

広大な田んぼの風景は圧巻！



津有から見る妙高三山

雁木通りの町並み

江戸時代の初め、高田城が造られた時代に、街に出る道の全ては高田城下を通ることになり、城下町の出入口は3か所に限られました。そのうちの一つであった稲田口から四ヶ所・戸野目までの松之山街道に沿って、町並みが形作られていきました。

戸野目の地名の由来は「戸・の・目」、つまり「集落や町・の・入口」とされています。



大ケヤキと出会いの清水

吉岡東市野口の諏訪神社には、推定樹齢500年の大ケヤキがあります。そして大ケヤキの根元から清水が湧き出ている、いつの頃からか「出会いの清水」と呼ばれるようになりました。

昔から、道行く人が喉を潤したり、近所同士の交流の場であったそうです。素敵な呼び名ですね。



旧津有村社 八幡宮

稲の八幡宮として知られ、昔は1市3部の相撲大会が行われていて、大変な賑わいだったそうです。



保阪邸



高田城址公園の蓮は、現在の当主の曾祖父に当たる保阪貞吉氏が高田藩士のためにレンコンを栽培・販売したのが始まりでした。離れの怡顔邸は寺院風玄関と主屋の数寄屋造りが対照的な豪農の邸宅です。内部には繊細な装飾が数多く施されています。美術品収集家でもあった保阪家には魅力的で珍しい逸品が数多くあります。

地域性

地域の行事「さいの神」

お正月の年中行事として、「さいの神」があります。この名には「幸神(さいわいのかみ)」の意味があるそうです。「餅やスルメを焼いて食べると風邪をひかない」や、「書初めを燃やし、紙が上空に舞い上がると字が上手になる」という言い伝えがあります。



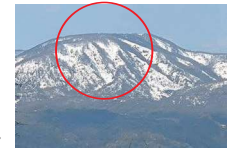
夏まつり・盆踊り

「八社五社」は、上越地方で唄われ踊り続けられている民俗芸能です。10世紀初め、関川を挟んで西に八社東に五社あった神社が、正式な神社として認められました。これを知った村人たちが喜び、唄い、踊ったのが、民謡「八社五社」と言われています。津有地区では「津有北部八社五社同好会」が伝承・啓発活動の中心的役割を担ってきました。



言い伝え

「鳥が高く飛んで帰るとき、明日は晴れ」
「西虹は雨、東虹は百日の日照り」
「南葉山に雪男(=雪形)が出たら稲の種まきをする」
雪男は種まき男と言われることもあります。同じく雪形では、妙高山にできる、はね馬が有名です。



郷土料理



「ちまき」は奈良・平安時代から、「笹団子」は戦国時代から食べられてきたそうです。笹には殺菌作用があることから、戦国時代の携行保存食(持ち歩きが出来る日持ちの良い食品)とされ、「上杉謙信公も携帯していた」など、色々な言い伝えがあります。



「笹寿司」は、クマ笹の上に酢飯をのせて具材や薬味を盛りつけたものですが、地域によっては、みょうがの葉を代わりに使うこともあるようです。主に、ハレの日の料理として作られ、お盆や祭りなど人が多く集まるときに振る舞われていました。



「のっぺ」は、雪深く、買い物もままならない冬場に、たくさん作り置きをして雪を冷蔵庫代わりにして鍋ごと雪の中で保存していたそうです。その名残りからか冷やして食べたりもします。地域の家庭料理として親しまれています。

方言



「とぶ(走る)」



「ねってた(寝てた)」



「先生にかけられた(当てられた)」



「ずる(動く)」

クイズ どの方言、わかります？



おらもうやだわ



しょうしい



ばかいいねかね



よわったねや